
月好きの日常

咲坂 美織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月好きの日常

【Nコード】

N4142X

【作者名】

咲坂 美織

【あらすじ】

私は月が好き。名前に月が2つも入ってるからかもしれないけど。ある日私が月を眺めていると、1人の小さな男の子がやってきた。どうやらこれでも同い年らしい。

明日からの高校生活が何だか楽しいものになる予感がした。

はじめまして。（前書き）

私はある日突然（しかも受験勉強中に）あることを思った。

“ 日常を小説にしたらどうなるんだろう？ ”

事件があるから物語になるのであって、日常は事件がないから物語にはならない。

……誰が決めた、そんなこと。

日常だって、事件であふれているではないか！

はじめまして。

今にも日が沈みそうな夕暮れ。私は一人、町はずれを目指して歩いていた。

「うーん、今日もいい天気。でも早くしないと日が暮れちゃうな」

そう言いながらもゆったりと歩く。

日の光が完全に消えたところ、私はゆっくりと歩みをとめた。目の前には古い雑居ビルがあった。

周りに人が居ないのを確認して、そつと中へと体を滑り込ませる。思ったよりも遅くなったから、近くにある階段を駆け足で上っていく。

「間に合ったかな」

階段の一番上にある屋上へと続く扉を開けると、目の前に柔らかな光がふわりと広がった。

「……うん、今日もきれいだな」

目の前に浮かぶ丸い月。明るくて大きな月。昨日とは違う、そして明日もきつと違う顔を見せるであろう月が視界いっぱい広がっている。

屋上の真ん中に膝を抱えて座りながら、ぼーっと月を見上げた。きつと明日にはまた違う顔が見られるんだろうな、なんて思いながら。

その時、後ろにある扉からギギツという微かな音が聞こえてきた。今まで6年間ずっとここで月を見上げてきたけど、私以外の人がここに来るなんて初めてだ。

ゆっくり振り返ると、そこには小柄な人影が見えた。
身長はたぶん私と同じか、少し低いくらい。

「あれ、先客がいたか」

そう言いながら小柄な人影は私のそばにゆっくりと歩み寄ってきた。やっぱり身長は私のほうが少し高いみたい。

「女の子がこんなに夜遅くに一人か。あんまり良くないんじゃないの?」

「そっちこそ、子供がこんな夜遅くに一人でいちゃいけないんじゃないの?」

「子供って、おい! 俺こう見えても明日から高校生だぞ!」

「えっ、嘘」

「……嘘じゃねえって。そんなにマジでびっくりしなくても……」

そういうと、一人でブツブツ、やっぱり俺って小さいか、とか、どうせ俺はチビですよ、とか言い出した。

どうやら身長が低いことはコンプレックスだったらしい。

「えっと、実はさ、私も明日から高校生なんだよね」

「嘘……。俺、同い年の女の子にも負けたのか……。コホン、すごい偶然だな」

あー、最後ちょっと棒読みになった。言わないほうが良かったか

な。

「……まあ、しゃあないか。今に始まったことじゃないし……。俺、陽平ようへいっていうんだ。もしかしたら同じ学校かもしれないし、一応挨拶！」

「私は美月みつき。美しい月、って書くの」

「へえ、美月か。まるで今日の月みたいだな」

「私あんなに綺麗じゃないよ」

見ず知らずの人に名前を教えるなんて、今日の私はどうしちゃったんだろう。私がおかしくなってしまったのは、陽平君が優しい雰囲気を出してくれていたからなのか、月のやわらかくて優しい光のおかげなのか、よく分からない。

でも、確かに覚えていること、それは……。

「美月ちゃんもかわいいと思うけどな」

初めて会った人に胸をときめかせてしまったこと。

はじめまして。(後書き)

実はこの作品、先日完結した『例え、君が幽霊でも』の元小説となっております。

順番逆だろ！ と突っ込まれた方、ごもつともです。

これからませひ時間が空いているときには、この子たちの物語を読んであげてください。

貴方にとってこの物語が楽しいものでありますように。

以上、美織でした♪

第1夜（前書き）

奇跡の再会はお約束ですよね。

第1夜

初めて陽平君に出会った次の日、私は3回目の入学式を迎えていた。小学校、中学校に続く3回目。何度やってもこの緊張感は消えない。

新しいことが始まることへの期待と不安。

それらが全部一度にやってくるのが入学式なのだ。

「如月 美月」

「はい」

ぼーっとそんなことを考えていると、今日から担任になるのである。ろう教師に名前を呼ばれた。返事をして立ち上がる。

……そういえば陽平君って、何処の学校なんだろう。まさか同じ学校、なんてことはないよね。

一度そう思うと、やっぱり気になってしまるのがヒトの性つてものだ。自分の後に呼ばれる人の名前に耳をすませた。式中にきよろきよろするのはあんまり良くないからね。

「以上、319名」

最後のクラスの呼名を行っていた教師がそう言って、今年度入学生の名前が呼び終えられた。やっぱり、陽平、なんていう名前の人はいなかった。

「やっぱり偶然なんてありえないよね」

ちよつとがっかりしながら、これから1年間過ごすことになる新しい教室へと入って行った。

「改めて、今日からこのクラスを担当することになった、遠峰大地だ。担当は古典。まだまだぴちぴちの25歳だ。ちなみに彼女は募集中なんで、よろしく。俺からは以上。じゃあ、窓際の1番前の人から自己紹介してくれ」

何なんだ、この人！ 25の大の男が何がぴちぴちだ！！ しかも自分の教え子に彼女募集中、よろしく、って誰にだ！ 親か。母親に言えいいのか！？

私が盛大に（心の中で）突っ込んでいると、いつの間にか私の番が回ってきていた。やば、何にも考えてなかった。

「えと、如月美月^{きづきみづき}。南中出身。趣味は月を見ること。誕生日は10月。以上、よろしくお願いします」

座ってから激しく後悔。なんて面白みのかけらもない自己紹介。しかも何か余計なことまで行っちゃったような気がしないでもない……。こんなんじゃ誰も寄ってきてくれないよ……。

予想通り、休み時間、私のところに寄ってくる人はいなかった。近くを通った時に声をかけることはあっても、話しこもうとすることはなかった。

私はどちらかといえば、自分から話しかけるのは苦手なほうだか

ら、話しかけてもらわないと話せないんだけどな。

そんなこんなで昼休み。

1人お弁当を抱えながら教室をきよろきよろ見回す私がいた。

「お弁当どうしよう……。初日から1人なんて寂しすぎるしなあ」

やはり先ほどの自己紹介がいけなかったのか、みんな悪気なく私を無視している。初日から1人で食べてると、きっと1人が好きだとか思われて、ずっと1人で食べることになるんだろうなあ。

「どうしよう……」

「……らぎさん、如月さん！」

「うわ！ あ、は、はい！」

まさか急に私に話しかけてくれる人なんかいないと思ってたから、かなりのオーバリアクションをしてしまった。恥ずかしい……。

「えと、大丈夫？ あのね、如月さんのこと呼んでいる人がいるんだけど」

「あ、ありがとう。ごめんね」

驚かせてしまった子に一言謝ってから私は出入り口のほうを見た。

「え、あれ、嘘……」

びっくりする人物がそこにはいた。

「こんにちは、キサラギ ミツキさん。俺のこと覚えてる？」

「覚えてるも何も、昨日会ったばかりではないですか」

「あれ、何故敬語？」

「え、だって、私あまり陽平君のこと知りませんから」

「昨日のは？」

「あれは、……年下だと思ってたから……です」

「……………」

二人の間に流れる微妙な沈黙。

「ところでさ、もし一緒にお昼食べる人がいないなら差、俺たちと一緒にどう!？」

「うん!？ 喜んで!」

変なテンションになったのは仕方がない。うん。許せ。

「じゃあ、俺の友達待たせてるし、食堂行こうぜ」

「え、あ、はい」

「それと、敬語とか別にいいから。俺も美月って呼ぶし、俺のこと陽平とか、陽ちゃんとか、適当に呼んでよ」

「はい、分かりまし……分かった。じゃあ、陽ちゃん、って呼びま……呼ぶね」

私の敬語と常体が混じった変な言葉遣いに陽ちゃんは苦笑しながら、手を差し出した。

「これからよろしくな。じゃ、行こっか」

「うん!」

やっぱり陽平君がいい人でした。

第1夜（後書き）

元は自分で好きなように書いていたので、切れ目がバラバラです。
短いのもあれば長いのもある……。

いつそのこと書きなおそうか。……でもめんどい。

第2夜（前書き）

課題が終わりません（泣

でもストックしておいて良かったです。

おかげですぐにアップできます☆ 早めが大事ですね……。

第2夜

校舎内を歩くこと、約5分。1年生の教室からは若干遠い場所にあるのが、この美華^{みかつき}突高校食堂だ。

陽ちゃんと一緒に入ると、入口から1番遠い（といってもそこまで広くもないので、すぐに見つかる）席に座っている男女3人が声をかけてきた。

「おい、陽平！ こっちだ！」

「そんなに大声出さなくても聞こえるつつうの」

そんなことを言いながら、陽ちゃんはその声がしたテーブルのほうへと近づいて行った。

「遅ーよ。それよりも、その子？ 昨日会ったっていうのは」

「そう。如月美月さん」

「はじめまして。如月美月です」

「かわいいー！ 俺、中山大知^{なかやまだいち}っていうんだ。ついでに2組！ よろしく！」

「おう！ こいつが俺らの中で1番のバカだ」

「何だと！ でも言い返せないのが悔しいぜ！」

なんか楽しそうな人たちだな。

私はちよっとほっとした。この人たちなら、3年間楽しく過ごせそう。

「はじめまして、美月さん。あたしは遠峰^{とほみね}ゆかり。あたしもだいちゃんと一緒に2組よ。いやあ、あたし男の子の中で女の子1人だったから居心地悪かったのよねえ。これからよろしくね」

「え、女の子1人って……。あの人は？」

私はそう言って、テーブルの端のほうに1人黙って座り、紙パツクの牛乳を飲んでいる人を指差した。ちらりと見た感じでは、女の子に見えたけど……。

「……ん、何？ 僕の顔になんかついてる？」

「じゃなくて、自己紹介でしょ、自己紹介！」

思いつきりゆかりちゃんに頭をはたかれたその人は、ちらりと私を見た後、いかにも面倒臭そうに自己紹介した。

よこやまりんたろう
「横山凜太郎。2組。帰宅部予定」

「あ、はあ。如月美月です。こちらこそよろしく……」

「凜ちゃん、あんた自己紹介短いわ。そんなだから友達少ないのよ」

「別に、気にしない」

強いな、この人。私だったら無理だな、友達がないなんて。

なんて変なところで感心しながらぼーっと新しくできた友人たちを眺める。

「いい加減にしなよ」

「へ？ 私？」

「違う。あんたの後ろの2人。他の人の迷惑になってる。……まったく、いっつも後始末をするのは僕なんだから」

ため息をつきながらも、慣れた様子で手早く喧嘩になってきた2人を回収する凜太郎君。

何だかんだ言って、凜太郎君にとって2人は大切な友達なんだろう

うな、ということがその目つきから分かった。

「みんな仲良しなんですね」

「うん。あたしたちみんな同じ中学校から上がってきたからね。ま、腐れ縁ってやつ？」

「「お前が言うか!」「」」

3人からの見事な突っ込みが入って、私は思わず笑ってしまった。本当に楽しそうだな、この人たち。これからが楽しみだ。

「それよりもさー、早く飯食おうぜ、飯!」

「って、あんたは早弁してもう無いでしょうが!」

「ねえ、ゆかり様? 俺に弁当を恵んでくれないかなー、なんて」

「ったく、あんたは。入学式早々早弁するか?」

「だって、高校生の早弁、憧れてたんだー」

「憧れてた、ってあんた……。この大馬鹿者!」

「あー、出た。北中名物、遠峰中山の夫婦漫才」

「め、名物?」

「そう。北中出身ならだれでも知ってるぜ。こいつらの漫才みたいな会話。これを文化祭で披露したんだから、そりゃもうすげーのなんの」

「へえ、仲がいいんだね」

「良くないわよ!」

「えー、そんなあ。ねえ、お願いだから、分けて?」

今度は可愛らしくお願いすることにしたようだ。

正直男子がやるとキモい。凜太郎君がやるなら問題ないんだろうけど。

「気持ち悪いわ！」

案の定ゆかりちゃんの強烈なビンタがとんできた。痛そう……。

「だいたい、ここは食堂なんだから、昼くらい買えばいいでしょ？」

「今日財布忘れた。……恵んで？」

「……この、大馬鹿者！」

本日二度目のビンタ。ホントに痛そう。左の頬が赤く腫れあがっている。

それにしても、懲りないなあ、この大知っていう人。もしかしてこれが楽しくてやってるのか？

1人そんなことを考えていると、いつの間にか陽ちゃんが私の隣に来ていた。

「おい、美月。お前も早く食べないと、昼休み終わっちゃうぞ。昼飯食い逃しても知らねーからな」

「え、嘘、もうそんな時間？ やば、急がなきゃ」

私は慌てて椅子に座りなおしてお弁当を広げる。その隣に陽ちゃんも座って菓子パンを頬張っている。あんなので足りるのかな？ そんな私の視線に気がついたのか、陽ちゃんが説明した。

「これ、デザート」

……いつの間に食べ終わってたんだ、この人。

「まったく、しょうがないわね」

結局ゆかりちゃんが、大知君にお金を貸すことで話がまとまったよ
うだ。

「明日の昼だいちゃんのおごりね。……倍返しで」

ゆかりちゃんって、優しいのかひどいのか……。

「……食い足りねー。なあ、ゆかり。俺にも何か恵……」

陽ちゃんが急に言葉を切った。急に顔色が悪くなって、さらには
脂汗まで滲みだしている。

「いや、何でもない。何でもないです！」

目が合うと、ゆかりちゃんはっこり首をかしげた。ゆかりちゃんも陽ちゃんの顔色が急に変わったことが不思議なのかな？

再び陽ちゃんに視線を戻すと、今にも土下座しそうな陽ちゃんが
いた。変なの。

「さ、もうすぐ昼休みも終わるし、教室に戻ろうか。次は校舎見学
だって。もしかしたら一緒になるかもよ」

ゆかりちゃんの言葉で私たちはそれぞれの教室に戻ることにした。

第2夜（後書き）

話の切れが悪くて、いつもよりもちょっと長めです。

でも他の人の作品を読んでいると、もっと長めでもいいような気がするんですけど、どうですかね？ 1話につき30000～50000字くらいで。

第3夜（前書き）

ストックここでつきましたorz
受験中だったから仕方ないよね……。。

第3夜

「じゃあ俺、1組だから」

そう言って1番最初に抜けたのは陽ちゃん。軽く手を振って教室に入っていく。

「じゃあ、あたしたちもこれで。またあとでね♪」

そう言ってゆかりちゃん、大知君、凜太郎君の3人が抜けていく。

私はちよつとウキウキしながら3組の教室に戻った。とたんに感じる鋭い視線。ウキウキしていた気持ちが一気に消し飛ぶ。

その視線をたどると、1人の女の子と目があった。知り合いではない、はずなんだけど……。

何か気に障ることでもしちゃったのかな。

とりあえず話しかけてみることにした。

「えと、遠藤遥さんだよな。私に何か用かな」

「別に。何もないわ」

自己紹介のときに聞いた名前を必死に思い出して話しかけてみたけど、返事はとても素気ないものだった。

これは本格的にやばいぞ。私、何しちゃったんだろう。

「私、如月美月っていうの。よろしくね」

「……………」

空気が怖い。ひとまず愛想笑いを浮かべながら退散した。

自分の席に着いたところで担任の遠峰先生が教室に入ってきた。

「昼の前に言うの忘れてたけど、これから校舎の見学すつから、全員迷子にならないようについてこいよ。迷子になったら……知らん。自分で何とかしろ」

……なんていい加減な。

ん、待てよ。遠峰先生って、ゆかりちゃんと苗字が一緒だし、目元もなんか似てるような……。

「ほら、ついてこいよ」

1人でさっさと教室を出ていく遠峰先生。よく教師になれたな。苗字のことは後でゆかりちゃんに聞いてみることにして、ひとまず遠峰先生の後についていくことに集中した。

「あ、美月ちゃん」

1人で廊下をうろうろしていると、ちょうどゆかりちゃんたち、2組メンバーに会った。

「どうしたの？ 迷子？」

「あ、う、はい……」

「この学校、無駄に造りが複雑だからね」

絶対に迷子になるまいと頑張ってみんなについていていたのだが、気がつくと周りに誰もいない。

どうやら迷子になったらしい、というところでちょうどゆかりちゃんたちに会えた。

「んじゃ、あたしたちも行くのか。こっちだよ」

「ゆかりちゃん、分かるの？」

「うん。小学生のころからここに入り浸ってたから」

「え、何で？」

「こいつの兄貴、ここの先生なんだよ。大地先生って言って、すっげえカッコいいんだぜ！」

「確か、如月さんのクラスの担任じゃない？」

さっきまでずっと黙っていた凜太郎君が急に口を挟んできた。何だ、普段も喋るんだ。

「凜ちゃん、何で知ってるの？　　というか、大兄^{だいにい}って美月ちゃんのクラスの担任だったんだ」

「じゃあ、やっぱり遠峰先生ってゆかりちゃんのお兄さんだったんだ」

「まあね。ごめんね、大兄^{だいにい}って適当だから大変でしょ。現に美月ちゃん迷子になってるし」

私は曖昧に笑ってごまかすことにした。身内の人に悪口なんて言えるわけがない。

「お、何だ。お前らもう一緒にいたのか」

「おお、陽平じゃないか。お前も迷子？」

「んな訳ねーだろ。俺たちのクラスは自由行動なんだよ。ったく、

入ったばかりなのに自由行動って、迷子にさせる気満々だろ。まったく」

「んじゃ、全員揃ったところで行きましょっか」

というわけで、私たちは5人全員で校舎を見学することにした。それにしてもこの学校の先生って、みんなの適当なの？ いいのかな、これで。

「大兄、美月ちゃん連れてきたよ」

「あ、ゆかり。お前ら友達だったのか。ご苦労さん。それから学校では遠峰先生と呼ぶこと」

「生徒を迷子にさせる教師のくせに何言ってるの。……じゃあ美月ちゃん、またね！」

「うん、ありがとう」

ゆかりちゃんは、最後に遠峰先生に向って悪戯っ子のように笑いかけると、男の子3人を引き連れて立ち去って行った。

……ゆかりちゃんには絶対に敵わなそう。

「すまなかったな、如月。ゆかりは……、まあ、いい奴だと思うからよろしくな」

「遠峰先生って、妹思いなんですね。私、一人っ子なので羨ましいです」

「そうか？　そうでもないと思うけど……」

そう言うと、遠峰先生は恥ずかしそうに下を向いた。先生の新しい一面、発見か？

「おい、全員いるか？ だれか確認しろ。んでもって、俺に報告しろ」

前言撤回。遠峰先生は遠峰先生でした。

こんな大男が恥ずかしがるなんて、ありえない。さっきのはたぶん、私の見間違いだ。

「よし、たぶん全員居るな。それとさっき思い出したんだが、来週の月曜、新入生歓迎テストだから」

「えー！？」

たちまち上がる不満の声。特に多いのが、

「そんな歓迎いらねー！！」

という男子の声。

「じゃあ、やめるか？ あんなに苦労して入ったのにな。残念だけど、本人の意思なら仕方ないよな……」

「「やらせていただきます！！」」

初めてこのクラスがまとまった瞬間だった。やればできるじゃん、このクラス。

「範囲は入試のときと同じく中学までで習うところ全てだ。じゃ、帰る準備できた奴から帰っていいぞ」

なんて適当な！ でも早く帰れるなら文句言いません。
私はそそくさと帰る準備をすると、教室を出た。

「おー、やっと終わったか。早く帰ろうぜ。てか、美月ってどこに住んでんの？」

「やっと終わったか、って何でもう終わってんのか？ 私のクラスも早いほうだと思ったのに」

「まあ、あたしたちのクラスも、というよりもこの学校の先生たちって良くも悪くも適当な人たちばかりだからね。大兄見てれば分かるでしょ」

「まあ、ね」

「とりあえず帰ろうぜ。俺、腹減ったから何か食ってから帰りたい」
大知君がお腹を押さえながら言った。

「お前、財布忘れてただろ」

「凜におごってもらおう」

「……3倍返し」

「凜……、ヒドイっ」

悪いのは大知君です。ホントに懲りないな、この人。

「ま、でもどっかに寄ってくのも悪くはないかもね。どうせ行くなら僕、駅のそばがいい」

「そうね、駅のそばだったらかと便利だし」

というわけで、私たちは学校を出て駅のほうへと向かった。

第3夜（後書き）

次回から、もしかしたら話の雰囲気とか少し変わるかもしれません。
ご了承ください。

第4夜（前書き）

あまあまです。

初々しいです。

見てると若干いらいます。

そんなものでよろしい方のみ、先にお進みください（笑

私にこんなモノもかけたんだなあ……

第4夜

「「うま〜」」

口の中でとろける甘いアイス。これにときめかない女子高生がいないわけがない！

そんなこんなで駅前のアイスクリームショップにやってきた私たち5人は、甘いものが苦手だという陽ちゃん以外は全員手にカップに入ったアイスクリームを持っていた。

「しっかしよ、女子ってよくこんなんで腹もつな。俺、1コじゃたんねー」

「つか、女子はもとよりお前もよくそんな甘いもん食えるな」

1人甘いものが食べられない陽ちゃんはアイスコーヒーを片手に呆れ顔だ。

「だって俺、食いもんだったら基本何でも平気だもん」

「お前なあ……」

陽ちゃんは大知君に関してはもう何か諦めたらしく、凜太郎君のほうへと顔を向けた。

「凜、お前は甘いもん平気なのか？」

「僕、こう見えても甘党だよ？　このメニューは全部制覇した」

「「「ウソっ！」」」

ゆかりちゃん以外の全員の声がそろった。ゆかりちゃんは顔色一つ変えず幸せそうにアイスを頬張っている。

「ゆかりちゃんは知ってたの？」

「知ってるも何も、アイス全制覇に付き合ったのはあたしよ。たぶん凜ちゃんはあたし以上に甘いモノ好きよ」

意外だなあ。凜太郎君って、結構クールなイメージだから勝手に甘いものは苦手だと思ってた。

「何、僕が甘いもの好きじゃないけない？」

「いや、そういうわけじゃないけど……、意外だなーって。凜君の意外な一面発見、みたいなの」

とたんに怪訝な顔になる凜太郎君。私、何かまずいこと言ったかな。

私が1人あわあわしている、凜太郎君がまた口を開いた。

「凜君って……」

「あ、ごめなさい。嫌だった？ みんな凜とか、凜ちゃんって呼んでるから、私もいいかなって思ってた……。嫌だったら止めます」

「別に嫌じゃないけど。急だったからびっくりしただけ」

「じゃあ、凜君って呼ばせてもらおうね」

私は嬉しくなってしまう顔がにやけた。それに気がついた大知君がすかさず割り込んでくる。

「あー、凜だけずるい！　ねえ、美月ちゃん、俺のことは大ちゃんって呼んでよ」

「うん。分かった。大ちゃん、だね」

「じゃ、俺もー」

「って、陽ちゃんはもう陽ちゃんって呼んでるでしょ」

あ、そっか。といって頭を掻いた陽ちゃんに全員が笑った。特に大ちゃんとゆかりちゃんは遠慮なしに爆笑している。

「美月」

「え？」

「君が僕のこと凜君って呼ぶなら、僕も美月って呼ぶ。いい？」
「もちろん！」

今日1日で何だかみんなとすっごく仲良くなれたような気がする。私は人と話すのが苦手だから、こんなに人との会話で笑ったりしたのは初めてかもしれない。

それもみんな、この優しくて楽しい4人のおかげだね。

私は久々の楽しい会話を楽しんだ。

でも、放課後って短いもので、あっという間に外が暗くなってきた。

「うわ、もうこんな時間。そろそろ帰ないとまずいわね」

「ま、俺たち男組は別にいいけど、女の子はな。美月、家どこ？送ってくよ」

「え、そんな。いいよ。家、そんなに遠くないし」

「んー、でも、女の子が1人は心配だから、ね」

陽ちゃんの申し出に少々腰が引けながらも、お願いすることにした。

「じゃ、あたしのことは大ちゃんと凜ちゃんが送ってね」

「げ、俺はゆかりかよ」

「……………」

「大ちゃん、げって何よ、げって。それに凜ちゃん、何故黙る？」

帰る時も賑やかな3人を見送って、私と陽ちゃんも歩き出す。

「じゃ、俺たちも行こっか」

そう言って駅の方へと歩き出す陽ちゃん。

私が通う美華突高校は、東西南北にある中学校のちよつと北よりにある。

最寄り駅もどちらかと言えば北よりにあるから、私は通学には電車を使っていた。

「あれ、陽ちゃんも電車通？　北中出身じゃなかったっけ？」

「俺、中学卒業した時に南中よりのところに引っ越したんだよ」

「へえ。どこらへん？」

陽平君が答えた住所は意外と私の家から近かった。

「家、すぐ近くじゃん。もしかしたら朝とか会うかもね」

「俺、朝迎えに行くよ。美月一人だと寝坊とかしてそう」

「な！　そんなことないもん！　私、遅刻したことないもん」

「ホントか？」

陽ちゃんがニヤニヤしながら言った。からかってるんだな。むう。

そんなこんなしているうちに駅に着き、ちょうど来た電車に2人一緒に乗り込んだ。

寄り道したので帰る時間が中途半端だったのか、席は結構開いていた。私たちはドアのすぐ近くの席に並んで座った。

「そういえばさ、すごく今さらなんだけど、俺美月にちゃんと自己紹介してなかったよな」

「あ、そう言えばそうかも。最初会った時も結局あだ名とかしか言っていなかったし」

「悪い悪い。んと、じゃあ改めまして。俺の名前は井上陽平^{いのうえようへい}。8月生まれでO型。好きなモノはバスケットかな」

「私は如月美月。10月生まれのAB型。好きなことは月を見ること。これからもよろしくね、陽ちゃん」

改めて自己紹介して何だか照れくさくなった。そのまま目を合わせる事ができなくなったので顔を俯かせる。

下を向いているといういろいろ考えてしまうのがヒトの性というもので、そういえば私、こんなに至近距離で男の子と喋ったの、初めてかも……。

なんてことを考えているうちに、だんだんと顔が熱くなってきた。やばい、これは顔も赤くなってるかもしれない。

私の顔、見られちゃったかな、と思って陽ちゃんの様子をちらりとうかがうと、陽ちゃんも視線をそらしていた。その頬が少しだけ赤くなっていたように見えたのは気のせいだろうか。

「まあ、その、何だ。これからよろしくな、美月」

「こ、こちらこそ」

そんな若い2人の初々しい挨拶を、たまたま同じ電車に乗り合わせた乗客たちが微笑ましげに見ていたことに最後まで本人たちが気づくことはなかった。

第4夜（後書き）

感想、アドバイス、またはリクエストなどがありましたらお気軽に
どうぞ☆

間違いの指摘などもありましたらその度にちよくちよく直していく
のでよろしくお願いします。

次回は夜のお話です。またまた月が綺麗です。

第5夜（前書き）

甘い、甘いです。ここ大事です。2回言いました。
今回はホントに甘いです。書いてる作者本人が悶えるほどです。
なら書くな？ そんなの聞こえません。

第5夜

「あれ、美月んちってここなの？」

「うん。そうだけど」

陽ちゃんがやけに驚いた顔をして言った。次に、3軒先の角にある家を指差すと、

「俺んち、あそこ」

「ウソ!？」

めちやくちやご近所でした☆

「そっか、こんなに近いのかあ。じゃ、俺、明日から毎朝美月のこと迎えに行くよ」

「え、そんなのいいよ。私朝遅いよ?」

「俺が早く行って起こしてやる。んじゃ、明日7時半にな」

「え、ちょっと待って、私無理だってば!」

私の叫びには軽く手を振っただけで答えて、陽ちゃんは自分の家に入って行った。

ちなみに私が朝遅いのは本当で、今日も遅刻ギリギリの電車に乗っていた。その電車すら捕まるか怪しかったんだけどね。

「そんな、朝7時半、って私何時に起きればいいのよ……」

そんな私が普段起きているのは7時。確実に間に合わない。女の子は支度に時間がかかるものです。なら早く起きろって? 無理だから困ってる。

「お母さんに頼んでみよう……」

お母さんに事情を話すのはちょっと気が引けるけど、この際慣れるまではお母さんに頼むしか他にあるまい。お母さんはたぶん理由聞いたら大はしやぎして茶化すんだろうな……。
今から考えるだけで気が滅入る。

あ、でも起きれたとしても、朝陽ちゃんが来た時点で早起きする理由がバレるのか。どっちにしる母、大はしやぎ決定。

「もういいや。諦めよう」

いくら4月とはいえ、日が落ちるとだいぶ冷えてくる。風邪をひく前に家の中に入ることにした。

「ハアア。やっぱり茶化された……」

その日の夜、私はまた町はずれのビルの屋上に来ていた。
膝を抱えて三角座り。拗ねるポーズの完成。

案の定、母親に明日早く起こしてほしいこととその理由を伝えると、

「きゃー、何、美月にもとうとう春到来！？ お母さん嬉しいわあ！」

と、このテンションである。若々しいのはいいんだけど、もう少し

し大人になってほしい。

ハアア、ともう何度目になるのか分からないため息をついていると、背後のドアからギイッとドアが開く音がした。

「やっぱりここにいたか。女の子が夜に一人で歩くのは危ない、って言っただろう」

昨日と同じくそこには陽ちゃんがいた。

「って、どうしたんだよ。拗ねてんのか？」

私のポーズを見て陽ちゃんが聞いてきた。原因は貴方だよ！！とか言えるわけもなく、私はまた一つため息をついた。

「何だよ、俺なんかしたか？」

「したといえばした。してないといえばしてない」

「何だよ、それ」

陽ちゃんが苦笑しながら私に近づくと、隣に腰を下ろした。同時に、自分が着ていた上着を私に差し出した。

「着てろよ。寒いだろ。女の子が体冷やしちゃいけないもんな」

「いいよ。それじゃあ陽ちゃんが風邪ひいちゃう」

「だったら今度からはちゃんと着てくること。今はとりあえず着とけ」

と半ば強引に私に上着をかけた。まだ陽ちゃんの体温が残ってて温かった。

「……ありがとう」

「おう。俺は丈夫だからそうそう風邪なんか引かねえよ」

「そんなにちっちゃいのに？」

私が悪戯っぽく聞くと、陽ちゃんはにやりと笑って私に向けた上着に手を伸ばした。

「そんなこと言うなら俺も一緒に入るぞ」

「え、ちよつと待って。近い、近いって！」

私が一人あわあわしているのを見て気がすんだのか、陽ちゃんは上着から手をパツと離して笑った。

陽ちゃんの笑いが収まると、私たちはそのまま二人で並んで月を見上げた。やっぱり昨日が満月だったらしく、今日の月は少しだけ欠けている。

そんな月をしばらく眺めていると、陽ちゃんが唐突に話しかけてきた。

「そういえばさ、美月って毎日ここから月眺めてるのか？」

「うん。もう6年になるかな。私、月を眺めるのが好きなの。観察ってほどじゃなくて、ただ単にぼーっと眺めるのが好き。もう日課みたいなもんだよ」

「そっか」

それからは特に会話らしい会話もなく、二人でただぼーっと月を眺めていた。

しばらくして、隣の陽ちゃんが小さく震えているのに気がついた。

「あ、ごめん、上着借りっぱなしだったから寒いよね。これ返すか

ら早く帰ろう」

「いや、寒さは別に平気だけど、そろそろ美月の親御さんが心配するよな。うん、帰ろう」

私が差し出した上着を着たとき、陽ちゃんが小さく、温かい、と呟いて微笑んだのは見なかったことにした。

「どうした、美月？ 顔真っ赤だぞ」

「別に!？」

ちょっと声が裏返ったのはご愛嬌だ。

陽ちゃんが変な奴、と小さく笑いながら私の手を握った。寒いから、と言い訳して陽ちゃんはそのまま歩き出す。

一歩ごとに私の心拍数も上がっていった。

第5夜（後書き）

体調不良と課題が重なって更新遅くなりました。
はい、もう元気です。大丈夫です。こんな甘いもの書いてても平気です。

なんかもう、いろいろフラグが立ってます。察しのいい方はもう気がついてると思います。美月はああでこうなります。
え、分からない？ 作者はネタばれしない主義です。

第6夜

「美月！ おはよー！」

次の日の朝、陽ちゃんは約束通り7時半きっちり私のことを迎えにきた。昨日私と同じで夜遅かったはずなのに、何でそんなに余裕があるんだ？ そんな私も今日はきっちりお母さんに早めに起こしてもらったから余裕。……起こすときにまた軽く茶化されたのは秘密だ。

「おはよ、陽ちゃん。昨日遅かったのに早いね」

「うーん、俺、朝早いのは慣れてるから。もともと中学ではバスケットやって、朝練とかあったし」

「え、陽ちゃんってバスケットしてたの？」

「……何だよ、そのめっちゃ驚いた顔は。ちっちゃい奴がバスケットってちゃ悪いだよ」

「いや、そういう意味じゃなくて。……そう、初耳だったから！ 陽ちゃんのことまだ何にも知らないな、って思ってる」

また陽ちゃんのどうせ俺なんて、が始まる前に私はフォローを入れた。フォローになってるか？ これ。でも効果はあったらしく、陽ちゃんがそれもそうだな、といって機嫌が直った。

「そーいやまだ会って3日目だしな。お互いのこと知らなくて当たり前か。俺、知ってると思うけど北中出身で、引退するまでバスケットやってたんだ。美月は？」

「私は美術部だった。とはいってもいつも月の絵ばかり書いてたから変な人扱いされてたけどね」

「らしいや」

ちょっとひどいことを言って陽ちゃんはハハハ、と笑った。私も悪い気はしなかったので、一緒に笑う。こんな朝も悪くないかもしれない。

陽ちゃんと笑いながら歩いていると、あっという間に駅に着く。駅のホームに入ると電車はすぐに来た。

「すごっ。タイミングぴったり」

「ぴったりって……。電車の時間に合わせてきたに決まってんだろ」

「え、そうなの？ 私何も考えずに家出てたから20分待つとか普通だったなあ」

「お前なあ……」

陽ちゃんが何か言いたそうな顔をしていたが、諦めたのかため息をひとつついただけで何も言わなかった。変なの。

「ほら、陽ちゃん。早く乗らないと電車行っちゃうよ」

私は動かない陽ちゃんを押して電車に乗り込んだ。いつもよりもずっと早い電車は結構空いていて、2人並んで座ることができた。

「すごい。ちょっと頑張って早く来るだけでこんなに違うんだ」

「すごいって、お前いつも何時に来てるんだよ」

「うんと、8時くらい？」

「うわ、ギリギリ。もっと早く来いよ」

「だって、起きられないんだもん。月とか見ると夜遅くなっちゃうから」

「それもそうか」

お。陽ちゃんは早く寝ろとは言わない人らしい。

私が早く起きられない理由を人に話すと、だいたいの方は月なんか見てないで早く寝ろという。陽ちゃんのように何も言わないのは少数派だ。

「お前、月見るのホントに好きだもんな」

ドキッ。心臓が跳ねた。何も言わなかった人はだいたい呆れて何も言えなかった人だ。私の好きなことを理解したうえでこう言うってくれる人は初めてだった。

「どうした？ 顔ちょっと赤いぞ」

「何でもないっ」

ふいつと陽ちゃんから顔を背ける。

「何だよ、急に。変な奴」

そう言っ、顔を見ていなくても陽ちゃんが小さく笑うのが分かった。私の心臓はまだドキドキしていた。

「ほら、もう降りるぞ。それとも乗り過ぎたいのか」

「降りるもん！」

陽ちゃんがからかってきているのは分かっているけど、ついつかみついてしまう。反射でかみついてしまうのは、陽ちゃんがこのぐらいでは嫌わないと信じられるからか。

って、私朝から何考えてんだ！？ これじゃまるで……

「おはよう！ 美月ちゃんどしたの？ 顔真っ赤。恋する乙女みた

……」

「それ以上言わないで!!」

気がつくと駅を出たところでタイミング良く鉢合わせたゆかりちゃん。私の顔を見てニヤニヤ笑っている。さっきまで同じことを考えていただけに、恥ずかしさ倍増だ。

「もう、美月ちゃんったら朝からカワイイ♪」

「~~~~~ッ」

今日は朝からからかわれまくりだ。私の心臓もドキドキしっぱなしだし、何だかもう疲れた。

「おはよー! 美月ちゃんに陽平」

「おはよ」

ゆかりちゃんの後ろから大ちゃんと凜君もやってきた。3人は家も近いらしい。

「いいな、陽平。朝から美月ちゃんと一緒かよ。俺なんか……」

「俺なんか、何? 大ちゃんはあたしじゃ不満?」

「何でもないです!!」

朝からコント状態の2人の会話に、私と陽ちゃんは顔を見合わせて笑う。

「ほら、せっかく美月と陽平に合流したんだから早く学校行こう」

やれやれ、といった感じで凜君が間にはいる。大ちゃんはほっとしたように、ゆかりちゃんはちよつと残念そうにいがみ合いをやめ

る。

「中学の時もこんな感じだったの？」

陽ちゃんにこそっと尋ねる。そしたら陽ちゃんもこそっと返してきた。

「そ。朝こんな感じで言い合って、途中でしびれ切らした凜が仲裁するまで続けんの。俺は面白かったからそのまんまにしていたしな」

中学生のころの登下校の様子が容易に想像できて、思わずくすりと笑いをこぼす。

「ねえ、美月ちゃん」

「ん、何？」

大ちゃんと言い合ってたゆかりちゃんが私に近寄ってきて、耳元に口を寄せながら言った。

「美月ちゃんは、陽ちゃんのこと、好き？」

「！？ そんなことないよ！」

急に大声を出した私に不審げな目を向ける男子3人。慌てて声のトーンを落とす。

「なんで、どうして、急に何？」

「だって、美月ちゃんやけに赤い顔してたから。ふふ、楽しみだわ」
♪

何が楽しみなのか分からないけど、また真っ赤になってしまった

私を不思議そうに見る男子3人の視線から逃げながら学校へと早足で向かった。

第7夜

「やっと着いた」

学校に着くなり、ゆかりちゃんから逃げるように自分の教室に入ってしまった。

教室内を見回すと、まだ朝早いせいか人はかなり少ない。

「確か今日は1時間め、国語だったよね。あ、高校って現代文と古典に別れるんだ。今日は……古典か。ってことは遠峰先生が最初の授業か」

一人でブツブツ言っていると、教室のドアがガラリと開いて、人が入ってきた。

「あ、遠藤さん」

「……おはようございます。今日は早いんですね」

なんかすんごい嫌味言われたような気がするけど、私ホントに何しちゃったんだろ。

小心者の私は口の中でもごごとおはようございます、とか言いながら視線をそらした。

遠藤さんはそんな私を気にした風もなく、自分の席に着くと昨日もらったばかりの教科書を広げた。

「うわ、偉！ 予習してるんだ」

「……皮肉ですか？ それともただ私の邪魔をしたいだけですか？」

口調は疑問の態を保っているが、その実かなり怒っているのが分かる。私は慌てて弁解した。

「いえ、私はただ素直にすごいと思っただけで……。邪魔したなら謝ります。ごめんなさい」

素直に謝った私に少し驚いたのか、軽く目を瞋ると少し柔らかくなった口調で話しかけてきた。

「ただ、高校の授業が不安だっただけです。普段私、予習なんかしてませんよ」

「あ、そうなの？ 実は私も」

そう言って、小さく笑いあう。ちょっとだけ遠藤さんに近付けたかな？

これ以上邪魔するのも悪いので、私は自分の席についてぼーっと窓の外を眺める。遠藤さんみたいに教科書でも読んでいるのいいのかもしれないが、私が読んだら確実に寝てしまう。それが分かるぐらいには自分を知っていた。

「んー、暇。ゆかりちゃんのクラスにでも行ってみよっかな」

そう考えついた私の頭からは、すでに先ほどのことなんかきれいさっぱり消えていた。

2組の教室を覗き込むと、すでに陽ちゃんが来ていて、北中4人組で楽しそうに談笑していた。

私が中に入るのをためらっていると、凜君が私に気がついて近寄ってくる。

「どうしたの？ 中に入ってくれば？」

「いや、ちょっと入りにくいなって」

「ふうん」

そういうと、凜君は私の腕を掴んで半ば無理やり教室の中へと引っ張り込んだ。

「あ、美月ちゃん。やっと来た」

「早く来たからにはお喋り楽しまなきゃね。ま、部活始まるまでだけどね」

「部活って、ゆかりちゃんたちはもう入りたい部活決まってるの？」

「一応ね。あたしは中学の時もやってたし、バスケット部に入ろっかな、って」

「俺もバスケット部。ちっちゃいけどな」

「俺はサッカー部。それでも中学のときからやってたんだぜ」

「昨日も言ったけど、僕は帰宅部。特にやりたいこともないしね」

へー、みんなけっこう考えてたんだな。私はどうしようかな。何も考えてないや。

「美月ちゃんは？」

ゆかりちゃんに聞かれたけど、私はすぐに答えることができなかった。しばらく考えて出た答えがこれ。

「……分かんない。仮入部るとき見てから決めよっかな……なんて」「んー、別にそれでもいいんじゃないの。高校の部活って、中学の時よりも種類増えるもんな」

「あ、そうだ。美月ちゃん、決まってないなら一度バスケット部見に来なよ」

「バスケ部かあ。私運動苦手だからな……」

「マネージャーとかもあるし、見るだけなら。ね？」

そこまで言われたら断れるわけもなく、私は首を縦に振った。

「美月ちゃん、サッカー部にもおいでよ！　こんな可愛い子がマネージャーさんだったらチームの志気も上がるしね」

大ちゃんが目をキラキラさせながら言ってきた。そちらにも苦笑しながら首を縦に振って了承の意を伝える。それだけで嬉しそうな大ちゃんを見ていると、何だかこちらまで嬉しくなってくる。

「でも、まだ入るとか決めてないからね？」

これだけは念を押しておく。

「分かってるって！　ああ、俺美月ちゃん来たら張り切っちゃうかも！」

「ったく、相変わらず大知は単純な奴だな」

「あたしも行ってあげようか？」

「ご遠慮します！！」

この一言でまた言い争いになった。凜君は横でため息をついているけど、言い合う2人は何だかんだで楽しそうだった。

「じゃ、俺たちそろそろ教室戻るわ。予鈴なったしな。行こうぜ、美月」

「え、嘘、もうそんな時間？」

陽ちゃんが教室を出るときに、じゃ、といって手を振ると、まだ

言い争っている2人にため息をつきながらも凜君が手を振り返してくれた。

教室を出ると、1組の陽ちゃんは右に、3組の私は左に行く。別れる直前に陽ちゃんが、

「また昼にな。寝るなよ」

「分かってるって！」

からかってくるから、また顔が赤くなってしまった。教室のドアに手をかけて、軽く息を整えてから中へと入る。

時計を見ると、始業まではまだ少しだけ時間があった。

「まだ時間あるし、教科書でも読んでいようかな」

読むこと数秒……

「……(zzz)」

そのまま数分後。

「おーし、じゃあ1時間め始めるぞー。誰か如月起こしてやれー」

初めての授業からやらかしてしまった私であった。

第8夜（前書き）

吐く！ 砂糖吐く！！

作者本人が言っているのだから間違いありません。

もう一個別に分けて書いていくほうが若干シリアス気味なのでその分こちらで発散です。

やっぱり書くならベタ甘恋愛だね☆

第8夜

その日の放課後、私は昨日と同じメンバーと並んで帰り道を歩きながら、今日の出来事について愚痴っていた。

「それでね、あの後予習しようと思って教科書眺めてたら寝ちゃって……結局大地先生が入ってくるまで気がつかなくて起こされた……」

「お前教科書読んで寝るタイプか！ ハマりすぎてて笑える！」
「ちよっと、陽ちゃんに大ちゃん、笑いすぎ！」

私が噛みついているのは陽ちゃんと大ちゃんの2人だけだが、ゆかりちゃんと凜君も遠慮容赦なくクスクスと笑っている。まあ、私もそれ狙ってたから気にしないけどね。むしろ一緒に笑ってる。

「もしかして、美月ちゃんは勉強苦手な人？」

「うう、その通りです。ここに入れたのもびっくりするくらい……」

「何だ、じゃあ俺と一緒にだな！」

「いや、いくらなんでもお前と一緒にしたら美月が可哀想だ」

大ちゃんの言葉に陽ちゃんが遠慮容赦なく突っ込む。その横では凜君がやれやれ、とでも言うようにため息をついている。大ちゃんの成績ってそんなに悪いんだろうか？

「うわあ、そんなこと言われると来週のテスト心配になってきた……」

「私もだあ。入試のときと一緒に言われてもそんなのもう頭から抜けちゃってるよ……」

大ちゃんと2人仲良く頭を抱える。今日はもう金曜日だから、テストまで実質あと3日だ。

「ちょ、そんなに？ 大ちゃんはともかく美月ちゃんまでそんな子だとは思ってなかったわ」

「いいなあ、ゆかりちゃんは余裕そうで。凜君は……言わなくてもよさそう」

「ちょ、ちょっと待て。なぜそこに俺が入ってない？」

「え、だって陽ちゃんはこの2人に比べてあんまり……」

だって、陽ちゃんって結構バスケバカだったみたいだし、この性格と勉強ってあんまり結びつかない。せいぜい私と同じくらいかと……。

「あら、美月ちゃん。こう見えても陽ちゃんは北中で結構成績良かったのよ。このメンバーでは凜ちゃんあたしの次くらいに。学年で言う……30番くらい？」

「ゆかり、そこまでバラさなくも……。恥ずかしいだろ」

陽ちゃんが照れてる……、って、突っ込むところはそこじゃなくて！ 陽ちゃんって運動もできるのに勉強もできるんだ！ 私とは大違いだなあ……。

「ねえ、勉強ってどうやってたらできるようになるのかな？」

「あ、それ、俺も聞きたかった。万年最下位争いの俺にも教えてくれよ」

あゝ、やっぱり大ちゃんって最下位争ってたんだ。よくそれうちの高校入れたね？ 逆に尊敬です。

「そうね……。よし。みんな土曜日空いてる？ あたしんちで勉強会開くわよ！ 美月ちゃんもし暇だったらおいで。専属教師が見てくれるから」

そう言っただけ意地悪そうにゆかりちゃんが笑った。専属教師って、大地先生のことかな？ ゆかりちゃんのその顔でなんとなく察せられた。

「お、大地先生が見てくれんの！？ よっしゃ、絶対行く！」
「久々に大地さんが見てくれるのか。じゃ、僕も行こうかな」

ん？ 大地先生って何気に人気？ 勉強がとてよくできそうな凜君までもが楽しみにすると言うのだから相当なものだろう。

「俺、大地さんのおかげでこの高校入れたようなもんだしな……」
「そうねえ、あんたが大兄に1番迷惑かけてたもんねえ」

ゆかりちゃんのその一言でまたもや喧嘩勃発。しかし私にはもうそれがただのじゃれあいに見えないのでさりと無視する。
そんな私に凜君がこそと教えてくれた。

「僕たち、受験勉強するときみんな大地さんに教わってたんだよ。大地さん、教えるの上手だし。1番危なかった大知だから、大地さんもつきつきりで勉強見てたな」

「あはは、っぽいね」
「そういや凜も自分の勉強あるのに大知の勉強見てやってたよな」
「まあね。僕もみんなと同じ高校に行きたかったし」

お、何気に凜君の仲間思いなところ、発見か？ しかし、あの1番ピリピリする受験で他人の勉強まで見る余裕のある凜君……恐

るべし。私は絶対に見てもらおう側だな。

「まったく、勉強会するんでしょ。美月も困ってんだから早く予定決めちゃわないと」

凜君の仲裁でやっとゆかりちゃんと大ちゃんの言い争い（じゃれあい）が終わった。ホントに仲いいな、この2人は。ここまでくると逆に羨ましい。

「それもそうね。じゃあ、確か陽ちゃんは美月ちゃんと家近いのよね？ 陽ちゃんはあたしんち知ってるはずだから美月ちゃん連れてきて。時間は午後2時から！ 時間厳守よ！」

そう言って、いつの間にか駅の前まで来ていたので、そのまま凜君と大ちゃんを引きつれて立ち去っていくゆかりちゃん。もう、ホントに男らしい人です。

ゆかりちゃんの後ろ姿を見送った後、陽ちゃんと私は顔を見合わせて笑った。

「というわけで、時間厳守らしいので、1時半に迎えに行くよ」

「え、迎えに来てもらうなんていいよ。大変でしょ？」

「どこが大変なんだよ。家すぐ近くなのに。駅に向かう途中みたいなもんだし、気にすることねーよ」

「そう？ じゃ、お言葉に甘えて……」

うわあ、なんか恋人同士みたいな会話だなあ……。なんてことを考えていたら、ホントに恥ずかしくなってきた。内容的にはただ勉強会に行くだけなのに！

「ん、どうした、美月。顔赤いぞ。熱あるなら明日行くのやめとく

か？」

「あ、いや、別に熱とか無いから気にしないで！　じゃ、また明日！」

「また明日って、同じ電車だろうが」

うわぁ、私のバカ！　何でこのくらいでテンパってるのよ！

それから少し気まずい雰囲気（陽ちゃんは何か機嫌よさそうだったけど）のまま電車に揺られて帰る放課後でした。ホント、今日1日ついてない。

第9夜

「ふわあああ……。今何時……?」

次の日、つまり土曜日。私は眠い目をこすりながら枕元にいつも置いている役立たずの（自分で無意識に止めてるだけ）目覚まし時計に手を伸ばす。カーテンの隙間から差し込む日の光が殺人的な力を持って私に襲いかかるようだ。

「今日は陽ちゃんが迎えに来るから早く起きな……。1時……。? だ
と?」

瞬間はつきりと意識が覚醒する。

ちよっと待て。今日の約束は何時だった? もちろん1時半。変わるはずなんてあるはずがない。今の時刻は? ……1時1分。

「こんなところで1分も時間の無駄遣いをしてる暇があるか!!」

そこからの私はすさまじかった。誰か褒めてくれ、私を。

5秒で階段を駆け下り、10秒で髪を整える。さらに置いてあった昼食（という名の朝食）を15秒で平らげ、20秒で洗顔と歯磨きをすませる。ここまでで50秒、約1分だ。

続いて30秒で自室に戻って持ち物の確認をし、クローゼットを開けたところで私の時間は止まった。

シマッタ、ナニヲキテイコウ。

そもそも友達のうちに行くのだから、家にいるときよりもちよっ

とおめかしすればいいだけである。

ところがどっこい、今回は担任の家でもあるのだ。休日に先生に会うとか、何着てけばいいのよ!? まさか制服着ていくわけにもいけないし、あんまり派手な服も着ていけない。このさじ加減が微妙である。

結局クローゼットの前で25分間唸った結果、淡い色のシャツに濃いめのカーディガンを重ね、ひざ丈ののスカートという何とも無難で地味な格好に落ちついた。

姿見の前で一通り自分の姿を確認し、OKサインを出したところで玄関のチャイムが鳴った。時計を見ると1時半ぴったり。ギリギリ間に合った。

準備しておいた鞆を掴むと、私は階段を駆け降りた。

「行ってきます!」

一言だけ中のほうに声をかけて、私は外に飛び出した。

「よ! 今日は寝坊しなかったか?」

「し、してないもん!」

早くも凶星をあてられ、動揺する私。そんな私を見て陽ちゃんはクスクスと笑っている。

「まあ、いいや。じゃあ、行こっか」

陽ちゃんが駅のほうへと歩き始めたので私もその隣に並ぶ。隣を歩いていると、ふと疑問が浮かんだったので、私は訪ねてみることにし

た。

「ねえ、陽ちゃんの得意教科って何？」

「んー、基本的に理系教科なら得意だけど、物理が一番かな。美月は？」

「私？ 私は……国語……かな？」

「何だ、その自信なさげな感じ！」

けたけたと笑う陽ちゃんの声が住宅街に響く。一通り笑って気がすんだのか、陽ちゃんが私を振りかえった。もちろん私の機嫌はナメである。

「あー、悪い。悪かったって。だから機嫌直せよ。な？」

な？ って、機嫌損なわせたのはあなたでしょ！ とはヘタレの私には面と向かって言えるわけもなく、仕方がないので許すことにした。

駅について、またもやタイミング良くホームに滑り込んできた電車に乗り、いつも登校のとき降りる駅で電車を降りた。たぶん時間とか調べてきてたんだろうな。さすがです。

「ゆかりんちは駅から歩いて15分くらいのところだから」

そう言って歩道を歩き始める陽ちゃん。私が隣に並ぶとさりげなく車道側を歩いてくれた。結構紳士的なんだな。こう見えても。気づけば歩幅も合わせてくれているようで、何とも歩きやすい。

しばらく歩いて陽ちゃんは一軒の家の前で立ち止まった。

「ゆかりちゃんちって、ここ？」

「ん。で、あっちが凜ちで、そこが大知んち」

そう言ってゆかりちゃんちの斜め右前にある家と左隣の家を指差した。みんな近っ！

「んじゃ、行くぞ」

そう言って陽ちゃんがインターホンに手を伸ばした。

「……ありがとう」

小さくそう言ったら、陽ちゃんは一瞬だけ動作をとめた……よう
な気がしたけど気のせいかな？

ま、でも感謝をこめて、ね。一応。
帰りにもう一回言ってみようかな。

第10夜

インターホンを鳴らすと、ゆかりちゃんはすぐにドアを開けた。

「いらっしやい！ 美月ちゃんたちで最後よ。早く上がって上がって！」

「「お邪魔します」」

私と陽ちゃんは礼儀正しく頭を下げてから玄関に上がる。ゆかりちゃんの後について2階に上がり、右側の1番手前の部屋に入る。中にはすでに凜君と大ちゃんがすでに勉強を始めていて、丸めたノートで大ちゃんが凜君に頭をはたかれているところだった。

「痛ッ！ たたく、凜は勉強のことになると容赦ないよな……」

「それはお前が出来なさすぎるからだ。大知以外なら僕ももうちょっと紳士的に教える。そもそもお前はこれくらいしないと勉強しないだろう」

「うう……その通りです」

へえ、意外。凜君もこんな風にじゃれあうこともあるんだ。いつもクールな凜君が子供みたいに言い合ってるのはかなりレアかもしれない。

じっと見つめる私の視線に気がついたのか、凜君が顔を上げた。目が合うと、凜君はすくっと立ち上がり、私のそばまで来た。

「今日の僕、なんか変？」

「あ、いや、ちょっと珍しいな、と思って。凜君はいつも仲裁とか抑え役だからじゃああってるところ見たこと無かったし」

「ふーん。ま、僕も今日はoffモードだからね。僕って結構子供っぽいよ。がっかりした？」

「全然。逆に新しい一面発見して嬉しいかも」

私の言葉に凜君は苦笑してそのまま離れていった。

「じゃ、全員揃ったことだし、先生呼んでくるから。それまでちょっと待ってて」

ゆかりちゃんの言葉にそれぞれ持ってきたワークやらノートやらを出して広げた。私も数学と英語のノートを広げる。書いてあるのは超基本的なことなので若干恥ずかしいが、頭の出来の悪さはすでにカミングアウト済みなので今更だろう。

大ちゃんが凜君に頭をはたかれつつ勉強しているのを眺めながら待っていると、ほどなくしてゆかりちゃんが大地先生を連れて部屋に戻ってきた。

「あ、如月も来てるのか。教え子が増えたな」

「すみません。お世話になります」

「いや、教えること自体は好きだから全然構わないぞ。むしろもっと連れてこい」

休日だからか大地先生の雰囲気もいつもとちょっと違う。これがあの初日から担当の生徒をほったらかしにした人物と同じなのか!?

「ホント、大兄といい、凜ちゃんといい、勉強のできる人はonとoffの差が激しいのかしら」

私の心の声を映したかのように、ゆかりちゃんがぼそりと呟いた。

私も心の中で激しく同意する。

「んじゃ、早速始めるとするか。凜、お前先に大知の勉強見てやれ。俺は手始めに如月の勉強見るから。ゆかりと陽平は自分で勉強できるな」

「分かりました。ほら大知、さっきの続きから」

「分かってるって。あー、もうどうしてアルファベットって1文字につき1音じゃないんだよ!!」

ゆかりちゃんと陽ちゃんは黙々とペンを動かし始め、大ちゃんはときどき凜君に「だから違うとさっきから言ってるだろ!」と怒られながらも自分の勉強をしている。ここまで凜君を怒らせることができるのは、もう一種の才能だと思う。うん。で、凜君はというと、大ちゃんの勉強を見ながらも自分の前に広げたノートに何か難しい数式を書き連ねている。……恐るべし、凜君。

「で、如月は何やるんだ?」

「一応英語と数学を持ってきました」

「んー、じゃあ……先に英語からやるか。他のやつらはしばらく質問でなさそうだし」

大地先生が一通りみんなのノートを覗き込んでから言った。大地先生はふと立ちあがって部屋から出ていくと、すぐに何やら分厚い本を持って戻ってきた。

「如月、基本的な構文は分かってるな? 最低限の英単語も」

「えと、受験勉強でやったくらいなら」

「じゃあ……このページの問題やってみろ」

そう言って大地先生は手に持っていた本の最初のほうのページを

開く。ざっと英文に目を通すと、なんとか書いてあることは分かりそうだ。

「これ、俺の大学のときの友人が書いたやつなんだけど、割と出来がいいんでこうして使ってるってわけ」

「先生のお友達ですか。すごく優秀な方なんでしょうね。私でも理解できそうです」

「まあな」

大地先生が少し照れくさそうに笑った。

それからしばらく大地先生に英語を教えてもらおう。そこでふと疑問を持った。……先生の担当って、確か古典だったよな。

そこで、問題が一区切りついたところで私は大地先生に聞いてみることにした。

「あの、先生。先生の担当教科って、古典ですよな？ 他の教科も教えられるんですか？」

「あ、うん。まあな」

「そうなんだぜ、美月ちゃん！ 大地さんってすっげえ頭いいんだ！！」

急に興奮した大ちゃんが話に割り込んできた。それを今にも誰か（大ちゃん）を射殺しそうな目で見つめる凜君。しかし、興奮した大ちゃんはそれに気がつかない！

「俺、全教科ダメだから、全部大地さんに見てもらったんだ。しかも全部分かりやすいんだぜ……」

「大知、人が説明しているのに他人の会話に入りこむとは……随分な余裕だね。じゃ、僕の説明もいらないよね？」

凜君、その黒いを通り越して闇のスマイルは超怖いです。大ちゃんなんか恐怖でガタガタ震え始めました。それを見たゆかりちゃんと陽ちゃんは爆笑しています。正直笑い事じゃないと思います。

「これ、ヒント無しで解いてごらんよ。僕の説明はいららないんでしょ？」

そう言って凜君が指差したのは今凜君が解いているのと同じようなかなり複雑な数式。当然私の頭ではそれが何を表しているのかすら理解することはできません。

「すいませんごめんなさいゆるしてください神様仏様凜様」

たぶん自分でも何言ってるのか分かってないんだろうな。そんな勢いで大ちゃんが土下座するから、元から爆笑していた2人に加え、大地先生もが大爆笑しだした。

「大知、Let's try.」

…完璧な発音withブラックスマイル。かなり怖いです。完璧に撃沈した大ちゃんが復活したのは、私が英語の問題を一通り解き終えて、数学の勉強に移る頃だった。

第11夜（前書き）

途中で自分が何書いてるのか分からなくなりました……。
今回ちょっと（かなり？）グダグダです。ごめんなさい。

第11夜

「先生、次、数学なんですけど……」

「ノート？ どれ、見せて……」

私がおずおずと差し出したノートを受け取ってざっと目を通す遠峰先生。みるみる表情が引き締まっていく。

「……………」

遠峰先生は無言でノートを閉じて置くと、また無言で部屋を出て行った。そして戻ってきたときに一緒に手に持っていたのは、また何やら分厚い本。

「予想外だった。まさかここまでの奴が大知のほかにもまだいたなんて。とりあえずお前はこれからここまでのページ、全部やってみろ。簡単な計算問題だから分かるだろう？」

「えーと、 $\sqrt{12} + \sqrt{3} \parallel \dots \sqrt{15}?$ 」 (※ $3\sqrt{3}$ です。)

「そっからか！？ ……お前、よくうちの高校合格したな」

というわけで私は遠峰先生に言われたページをひたすらせつと解いていた。2時間ほど続けていると、だんだん解くスピードが速くなってきた気がする。

その間、凜君やゆかりちゃんや陽ちゃんが遠峰先生に、

「この問題の※？✦？？'√？？△？？？？☆」

「ああそれは、？★？？？？？？？？★？？？？？？？」

読者様ごめんなさい。私の中でうまく脳内変換できなくてこのよ

うな結果になってしまいました。恨むなら私の馬鹿なこの脳を恨んでください。

何はともあれ、このような難しげな質問をしていた。

「そろそろ休憩にするか」

遠峰先生が、今にも（というかすでに）頭から湯気を出しそうな私と大ちゃんの様子を見たのか、休憩宣言をした。

その言葉に一齐に伸びをする私たち5人

「そうだ、これ、うちの姉貴から。勉強の息抜きに作ったから良ければ食べて、だって」

「梓紗さんから!? やった!」

一気にテンションが上がる私と大ちゃんを除く4人。何この異様なテンションの上がりよう。そして梓紗さんって誰?

私の疑問に気がついたのか、大ちゃんが説明してくれた。

「梓紗っていうのは俺の姉貴」

「梓紗さんのお菓子って、すごくおいしいんだよ。美月も食べてみる?」

そう言って陽ちゃんが差し出してくれたのは貝殻の形を模したお菓子、マドレーヌだ。黄金色に焼けたその菓子は、見るからにとてもおいしそうだ。

思わず唾をぐくりと飲み込んでしまう。

「……いただきます」

陽ちゃんからマドレーヌを受け取って、一口食べてみる。瞬間、口の中に広がるバターの香りと、砂糖とは違うほのかな甘み。

「これは……、蜂蜜？」

「美月よく分かったな。そう、蜂蜜。姉貴、お菓子作る時は隠し味に蜂蜜使うのがこだわりなんだって。砂糖とは違う甘みがあるらしいんだけど、俺には正直分からん」

そうか、やっぱりこの甘さは蜂蜜か。一人納得していると、目の前にもう一つマドレーヌが差し出された。顔を上げると、そこにいたのは陽ちゃん。

「美月、これ好きなんだろ。俺、甘いのが苦手だし、良かったら俺の分食えよ」

「そんな、悪いからいいよ。それに、陽ちゃんも食べてみたら？
これなら食べられるかもよ」

「んー、食えないことはないんだけど、俺が食うより美月が食べたほうがいいかな、って思ってた。美月、すごく幸せそうに食べてたから」

「なっ!？」

顔が一瞬で真っ赤になる。私、そんな顔で食べてた!？ 確かに甘いものは好き。特に手作りのお菓子は作った人の気持ちが伝わってくるような気がして、特に好きだ。だからといって、人前で頬を緩ませるようなことはしてなかったはずだ。

「私、頬緩んでた？」

「かなり」

「……見てた？」

「バッチリ」

恥ずかしさのあまり顔を俯かせてしまう。まあ、女の子同士だったらこの幸せを共有できるし、なにせ同性だからまだ許せる。けど陽ちゃんは男の子だ。異性にアホみたいに頬を緩ませているところを見られていたなんて、恥ずかしさで今なら死ねる。

「美月が幸せそうに食べてるところ見たらさ、もつとあげたくなるんだよ。何故か。だから、俺の分も食べて？」

「……陽ちゃんって実は、タラシ？」

「な！？ バカ、そんなつもりじゃ……」

「そうよね、陽ちゃんって結構罪作りな男なのよね」

「わ、ゆかり！？ お前急に入ってくんじゃ……」

「あら、美月ちゃんと二人っきりで話してたかったの？ ごめんなさいね」

「そうじゃない！！！」

ゆかりちゃんが入ってきてくれたおかげで私はなんとか落ち着きを取り戻せたけど、陽ちゃんはまだゆかりちゃんにからかわれている。それを見ている外野男子3人も笑って（大ちゃんは大爆笑）見ているだけで止めようもしない。

……陽ちゃん、だんだん涙目になってきてるぞ。顔はもう真っ赤だし。ゆかりちゃん、そろそろやめたほうがいいんじゃない？……。

とは思いつつも、陽ちゃんがこんなにいじられているところはなかなか見れないのでよく見ておくことにする。

「ゆかりの馬鹿！！」

最後に陽ちゃんがゆかりちゃんにそう言って部屋を飛び出していきりタイム終了。それを見た大ちゃんがさらに爆笑している。陽ちゃんの後ろ姿は、まるで少女漫画で『うわーんっ!』って言いながら走り去る女の子のようでした。結構おもしろかった。

「ゆかり、お前、もうちょっと手加減してやれよ。慰めに行くの、俺だぞ」

「いいじゃん、仲いい証拠だよ♪　じゃ、大兄、あとは任せた」
「はいはい」

遠峰先生はやれやれ、とでも言うように陽ちゃんを追って部屋を出て行った。

「ゆかり、ホントに男子には容赦ないよな」

「そうそう。僕も何度泣かされたことか」

「え、凜君も？」

「あんたは小2まででしょ。まったく、すぐに可愛げがなくなっちゃって」

凜君は小2のころから凜君だったようです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4142x/>

月好きの日常

2011年11月25日18時55分発行